



TITLE:

実践型地域研究ニュースレター No.5

AUTHOR(S):

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア
研究所: 在地と都市がつくる循環型社会再生のた
めの実践型地域研究

CITATION:

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア研究所: 在地と都市が
つくる循環型社会再生のための実践型地域研究. 実践型地域研究ニュ
ースレター No.5. 実践型地域研究ニュースレター 2009

ISSUE DATE:

2009-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/147134>

RIGHT:



朽木フィールドステーション

ホトラとベーラ：土地に根ざした野山の名前

火野山ひろば 増田 和也

「ホトラ山って、ベーラ山のようなものかしら？」

神奈川県川崎市宮前区土橋（つちはし）地区。ここに生まれ育った小倉美恵子さんは、朽木のホトラ山のことを知り、こんなことを尋ねてきました。土橋周辺では、堆肥・薪・炭の原木にするナラやクヌギなどの雑木を「ベーラ」、その林を「ベーラ山」とよんできたといいます。

現在の土橋付近には東名高速道路や東急・田園都市線が走り、閑静な住宅地が広がっています。しかし、小倉さんの記憶をたどると、1970年代以前の土橋には農村風景が広がっていたそうです。

ホトラとベーラ。似たような言葉の響きに誘われて、ベーラ山を訪ねてみました。今でもその様相をとどめている地域があると、小倉さんは川崎市・横浜市・町田市との境にある寺家（じけ）地区へ案内してくれました。一帯には関東地方に広く見られる谷戸（やと）地形が広がり、谷あいには水田、その両脇の斜面には雑木林や竹林が広がっています。

ベーラ山の中を歩いてみました。木々に目をやると、根元から何本も幹が分かれて株状になっています。



谷戸とよばれる地形。関東平野によく見られる。



ベーラ山の木は幹が根元から何本も分かれている。

それは、炭や柴として切った木々が、切り株から萌芽を何本も伸ばして育った姿であり、一本の木を

長い時間のなかで何度も利用してきたことを伝えていきます。

横浜市では、この景観の保全のために補助金を出しているとのことで、現在でも林のなかの下草はきれいに刈られていました。一方の町田市側では、ベーラ山は下草もそのままにすっかりと放置され、一部では竹が侵入しています。その対照的な様子は印象的で、ベーラ山は人との関わりのなかで維持されてきたことがあらためて意識されます。

ホトラにベーラ。生活と身近に結びついてきた野山は、それぞれの土地で独自の呼び名がありました。けれども、最近では「里山」という言葉が独り歩きして、人が暮らしのために関わってきた雑木林は「里山」として一括りにされてしまいます。「里山」という言葉では、それぞれの地域で営まれてきた人と自然の関わり方の個別性や多様性が消し去られてしまうのではないかと。それぞれの地域で親しみ深く伝えられてきたことを、まずは丁寧にみていくこと。そこから、土地土地の暮らしを支える原点が見えてくるのではないかと。小倉さんは、そう考えているようです。

*今回のベーラ山訪問は、NGO「いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク」がトヨタ財団の研究助成を受けて進めているプロジェクト（インドネシア・中スラウェシで映像記録を軸に山村文化を学びあう活動）の一環として可能となりました。

土橋の土蔵にはオオカミを刷り込んだ護符が貼られています。それは奥多摩の御岳山から毎年運ばれてくるものです。その護符を出発点に、小倉さんと由井英さんは、この地域の土地に根ざした暮らしを映像作品として描き起こしました（『オオカミの護符一里びとと山びとのあわいに一』）。ベーラ山はそのなかにも登場します。ぜひご鑑賞ください。詳しくは「ささらプロダクション」まで（<http://www.sasara-pro.com/>）



御岳山から毎年運ばれてくる護符

舟運文化が守る川

大阪商業大学 原田 禎夫

亀岡盆地を貫くように流れる保津川は、古くから水運が栄え、丹波の豊かな恵みを京の都にもたらしてきた。かつての水運は観光川下りに姿を変え、今もなお多くの人を魅了し続けている。

松尾芭蕉の有名な句、「五月雨を あつめてはやし最上川」でその名を全国に知られる山形県・最上川もまた、舟運文化が今なお流域各地に色濃く残り、「母なる川」として人々に愛されている川である。



雪の最上峡。かつては物資を満載した船が行き来していた。海からの強い風を利用して、上り船は帆を張って航行していたという。

古くから水運が栄えていた最上川であるが、1693年（元禄6年）、京都の商人・西村久左衛門による上流部の開削で大量の物資輸送が可能になり、紅花や青芋（あおそ）といった特産品^[1]が上方に運ばれ、出羽地方は大きな経済発展を遂げた。

今、最上川を訪れると、川漁師の船や川下りの観光船を除けば、かつて盛んに行き来していたであろう船の姿を見ることはほとんどない。しかし、現地での調査を重ねる度に感じるのが、流域を通じた人々の意識の“つながり”である。上下流、あるいは遠く京都との物資・文化面での交流を、実に多くの人が強く意識しているのである。

そして、この“つながり”は、河川環境に対する流域の人々の取り組みにも特徴的に表れている。河川環境をはじめ、治水、利水など川に関するさまざまな問題は、地域を越えた複雑な利害関係が絡む、非常に複雑かつ繊細なものである。このような複雑な問題を孕む川の環境保全に取り組むために「美しい山形 最上川フォーラム」が設立された^[2]。

このフォーラムは県民をはじめ、企業や行政機関、大学などの研究機関によって運営されているのだが、その大きな特徴は、すべてのメンバーが完全に対等なパートナーであるという点にある。例え

ば、住民が川で何かイベントを計画したとしよう。その際には、河川管理者である行政機関への申請や資金の確保など、非常に面倒な手続きが必要であるが、このような川を人々から遠ざける社会のあり方が、人々の川への無関心を助長し、各地で河川環境の悪化をもたらしてきたという一面もあろう。し、



「美しい山形 最上川フォーラム」事務局での聞き取り調査の様子。左から柴田洋雄会長、伊東憲昭事務局長、事務局スタッフの平野沢果氏。

かし、最上川においては、流域の地域ごとに設置された部会において、住民も行政機関も完全に平等な関係性のもとで徹底した議論がなされ、それぞれが「出来ること」をお互いに模索する中で、ベストな答えを見出す努力がなされているのである。

山形には「芋煮会」という風習がある。秋になると河原に集まり、里芋を使った鍋料理を、家族や友人、同僚らとともに食べる伝統行事である。この芋煮もまた舟運がもたらした文化のひとつであるが、大人から子供まで、川という共通の舞台を持ち続けていることが、最上川モデルともいえるべき河川管理のあり方を実現しているともいえよう。

今、我々は保津川において筏流しの復活を通じて、流域の人・山・川・町のつながりの再構築を目指しているが、最上川をめぐる人々の関係性には、大きなヒントが隠されているのではないかと感じている。



かつて舟運の中継地として栄えた大石田町の最上川。洪水防止を目的に1965年（昭和40年）から特殊堤防が整備されたが、この堤防整備により町並みと最上川は断絶してしまった。そこで、住民の要望をもとに2001年（平成3年）から、かつて立ち並んでいた塀蔵の風景を再現する修景事業が実施された。

脚注

[1]西陣織など高級織物の染料として珍重された。

[2]2001年（平成13年）設立。
<http://www.mogamigawa.gr.jp/>

守山フィールドステーション

“湖魚のナレズシ” 桶開き

守山F S 研究員 嶋田奈穂子

2008年6月から9月にかけて行いました、「湖魚のナレズシ」の漬け込み体験（詳細はニューズレター1月号）で作ったナレズシの桶を、先月10日に開きました。体験会に参加された方々を中心に、自分たちで漬けたナレズシを賞味しようというものです。当日は、滋賀県豊郷町にある酒造会社「岡村本家」さんにご協力いただき、地酒とともに近江の田舎料理を味わえる料理屋として当蔵が営んでおられる「遊亀亭」で試食会を行いました。

オイカワやカマツカなど、小さな湖魚は少し酸味がきつく、これが次の漬け込みへの課題であることがわかりました。ワタカやフナなど大きな魚になれば酸味も適度で、旨みがあり、「これは箸が止まらない！」という声があがるほど。今回、ナレズシを初めて食べるという方もおられましたが、「思ったより臭くない」「食べやすい」「うまい！」と上々の評価をいただきました。

体験会に参加してくださった中村力三さん、八重子さんご夫妻は、体験会の後日、復習を兼ねてご自宅でナレズシを漬けられたそうです。残念ながら都合がつかず、桶開きには参加いただけなかったのですが、「来年度の体験会を楽しみにしています。友達を誘って行きますね！」と、嬉しいコメントをいただきました。

琵琶湖から水揚げされたばかりの湖魚をさばいて、塩漬けから飯入れへと時間と手間をかけたナレズシの漬け込み体験会は、そのナレズシを口に入れてみることで、はじめて完結したようです。



桶から出したばかりのナレズシ

中山道守山宿の歴史文化シンポジウム

聖泉大学 高谷好一

すでに報告していますように、守山F Sでは市街地と農村と琵琶湖の3地区で活動をしています。今回は、このうちの市街地での活動の様子を報告します。

守山市では中心市街地活性化基本計画を進めています。どのようにすれば地元住民のニーズにあったものにすることが出来るのか。この点に狙いを定めて市役所の人たち、住民、F S関係者の混成メンバーで定期的な研究会を行っているのが、この活動の内容です。具体的には月一回のペースで研究会を開いてきました。その内容は以下の通りです。第1回「守山市における中心市街地活性化基本計画について」（宮本和宏、9月24日）、第2回「中山道守山宿の歴史」（川端弘、10月8日）、第3回「守山宿の古民家に住む者として」（山本正之、10月22

日）、第4回「中山道守山宿歴史文化保存会の活動」（川端美臣、11月19日）、第5回「守山市の地場産業と教育」（清原健・井上純作・山倉雅雄、12月16日）、第6回「守山宿の町家の可能性」（濱崎一志、1月22日）、第7回「中心市街地活性化基本計画再考」（舟橋和夫、2月18日）。以上が、今までに行ったものですが、これを総括し、また広く市民の皆さんにもこの活動と中身を知ってもらおうと、3月14日にシンポジウムを予定しております。皆様のご参加をお待ちしております。



中山道守山宿研究会のようす（2月18日 守山F Sにて 参加者18名）

催しのご案内

■守山活性化フォーラム

1. 日時：平成 21 年 3 月 14 日(土) 13:00-16:30
 2. 場所：エルセンター（守山市勝部三丁目）
 3. テーマ：地域資源の活用による中心市街地活性化
 - ・基調講演Ⅰ「滋賀県と守山の自然的・歴史的特徴」
高谷好一氏（聖泉大学総合研究所長 京都大学名誉教授）
 - ・基調講演Ⅱ「中山道守山宿の概説」～正しい歴史を踏まえて～
川端弘氏（前守山市教育長）
 - ・意見発表
 - ・パネルディスカッション
- 主催：株式会社みらいもりやま21 共催：京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所守山 FS、守山市、守山商工会議所
(詳しくは <http://moriyama21.jp/?p=906>)

■第 10 回 定例研究会

1. 日時：平成 21 年 3 月 25 日(水) 11:00～14:00 頃
 2. 場所：保津川(10:30 に JR 亀岡駅北口にお集まりください。)
 3. 発表者：上田潔（元筏士）、酒井昭雄（元筏士）
河原林洋（亀岡 FS 研究員）
 4. 内容：保津川における筏組の実演、試乗会
かつて保津川(桂川)は物資の一大流通経路であった。その一役を担っていたのが材木を運ぶ「筏」である。今回は、元筏士のお話を聞きながら、昭和の「カン筏」を実際に組み、試乗する。(通常は 12 連＝約 50M の筏であるが、当日は 3 連＝約 10M の筏を再現予定)
昼食：地元の食材を使ったお弁当を用意いたします。(実費負担)
服装：動きやすい服装。濡れる場合もございますので、着替え等ご持参ください。ウォーターシューズ等があれば便利です。
- *参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室
(担当：鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp)までご連絡ください。

ラオス出張報告

生存基盤科学研究ユニット研究員 矢嶋吉司

12 月 21 日から 1 月 10 日まで、トヨタ財団アジア隣人ネットワークプログラムの助成プロジェクト「農村文化・歴史を重視するアジア農村発展モデルの提唱ーアジアの開発途上国と日本の実践的ネットワーク構築による農村文化再創造活動ー(代表:安藤和雄)」(以後、プロジェクト)の活動の一環として、ラオスに出張しました。

このプロジェクトは、世代を超えて受け継がれてきた生活の知恵や生業の知識、伝統的な祭りや協働の習慣などを積極的に再評価し、人々の「村に暮らす誇りや生きがい」を育て、精神的な結束を強化する文化の創造・再創造活動をアジア的な人的交流のネットワーク活動として実践することを目的としています。具体的には、日本の農村で現在実践されつつある、文化と歴史を再評価する農村振興、地域おこし活動を企画実践する日本の住民組織、NPO、地方自治体、大学関係者と、文化と歴史の再評価を農村開発、地域社会開発に取り入れていこうとしているラオスの村の住民組織、NGO、地方自治体、大学関係者とのネットワークを構築し、日本とラオスでの研修やワークショップを通じた相互学習により、それぞれの運営方法や農村文化・歴史をアジア的視点によって評価し、各々の計画、実践に活かしていこうとしています。

ラオス国立大学農学部(以後、農学部)と現地 NGO PADETC がカウンターパートとして活動に参加します。ラオス国立大学と京都大学は、学術協定を締結するなど、これまで 10 年を超えて協力関係を維持してきました。特に、農学部の「ラオ伝統農具農民博物館」(以後、博物館)とは、その発足時から運営支援などが続けられています。

今回の出張は、関係者と実施計画を打ち合わせて協



農学部ラオ伝統農具農民博物館の看板と遠景

働体制を確立することと、日本農村スタディツアーへのラオスの招へい者を推薦してもらうことが目的でした。

1 月 7 日に農学部、PADETC の関係者が集まり、プロジェクトの人員構成と事務所について話し合いました。農学部学部長の Thongly XAYACHAK 氏、PADETC 代表の Sombath SOMPHONE 氏がそれぞれラオス側のプロジェクト代表、アドヴァイザーにつき、博物館の Inthong SOMPHOU 氏、Bounthone KEOJANDA 氏、Souphaphone RATTANARASY 氏の三氏がプロジェクト担当に決まりました。そして、博物館内にプロジェクト事務所を設けること、上記の担当 3 名が 2 月 25 日から 3 月 13 日まで来日し、京滋地域の農村を訪問することが決まりました。亀岡 FS、守山 FS にもお世話になります。日本の農村や都市近郊のみなさんとの交流をとおして、地域の取り組みを実感・体感して、母国での活動に役立ててもらいたいと考えています。

余談となりますが、今回、現地で何度か農村を訪問する機会がありました。ラオスの村には、まだ昔の生活の雰囲気があちこちに残されています。高床式の家の床下には、使わなくなった伝統的な道具や農具が無造作にかけられていました。

しかし、伝統的な衣装をかたくなに守っている北部のある村を訪れた際、その衣装を脱ぎ洋服を着る人たちが現れてきたことや、ある村人は、病気で町の病院に入院した際、町の人たちに自分の衣装を遅れたもののように見下すような眼差しを向けられ、それを機会にその人は洋服を着始めたとの話を聞く機会がありました。このように、人々の誇りが失われていくのだなーと考えさせられました。



村の服装。この村でも洋服を着る人が出てきた。伝統的な服装が遅れていると見なされることも多い。



民家で見せてもらったかなり古い花嫁の頭にまく布。おばあさんから渡されたものだといふ。